

効率戦隊 ヒフレンジャー

山口 麻里

岡山赤十字病院皮膚科医長

ブルブル、ブルブル。勤務中にスマートフォンが揺れ、画面をみると【着信中 ○○保育園】の表示。「……なんてこった!」と、不整脈が出るんじゃないかというほどの心臓の拍動を感じながら、応答のボタンをポチッ。「□□ちゃん、熱が出ています。お迎えをお願いします」——保育士さんの申し訳なさそうな言葉を皮切りに、今日中に最低限やらねばならぬこと、明日の病児保育、夫の予定、これらの情報が一斉に頭の中を駆け巡ります。このときだけは全力で頑張る私の脳内のシナプスたち。これから予測される怒涛の数日間を覚悟し、「ア、ハイ、ワカリマシタ。何分後ニハ迎エニ行ケルト思イマス」と平静を装いながら、内心ビクビクの私は病院をあとにします。

皮膚科医12年生、母6年生の私の日々は毎日ドタバタです。子どもができるまでは大学院生だったこともあり、家にはまさに寝に帰るだけで“病院で暮らす”という言葉がぴったりの生活でした。時間というものはほぼ自分だけのものだったのです。ですが子どもがいるいま、時間は自分だけのものではなくなってしまいました。

自分を医師として頼り大切な身を委ねてくださる患者さん、純粹に母を求める子どもたち、両者を思うと、医師・母としての自分の仕事はどちらもおろそかにはできないと感じます。でもそれにはいかにせん時間が足りません。「1日が24時間以上あったらいいのに!」と思うことはしょっちゅうですが、そうはいっても1日は24時間、この事実は変わりません。「助けて! ドラえもん!」と願っても、のび太くんではない私にドラえもんは現れません。分身の術を体得すべく伊賀か甲賀に修行に行きたいところですが、その時間もないのです。

そうなるとやはり、効率化と取捨選択が求められます。論文や文献は隙間時間にタブレットで読む、カレンダーアプリで夫とスケジュールの調整を行う、家事は食洗器やお掃除ロボットなど機械をフル動員(いよっ、頼れる相棒!), 化粧はササっと簡単に(マスクよ、ありがとう)、力尽きた日には畳みきれなかった洗濯物をみてみぬふりをしベッドに向かう、



など、そんな中にふとできた空き時間に、皮膚科学に思いを巡らせ、ミクロの中にある宇宙のような空間のあれこれを想像したりするのがとても楽しいと感じます。大学院時代に基礎研究をさせていただいた経験が、よりこの想像の旅を面白いものになしてくれています。

バタバタと慌ただしい日々ですが、これも近い将来には懐かしい思い出となり、昔話として笑いながら話すようになるのでしょう。いまはいましかないこの瞬間を、有意義に、明るく過ごしていきたいと思っています。